



沖縄県国頭郡「恩納村博物館」

# 本土復帰後の観光開発を生かした 地域文化の継承と発信

沖縄の本土復帰とその後の開発と密接にかかわりながら設立された  
地域密着型の小さな博物館。しかし、知恵と工夫で活発な活動を進めている

## 博物館を学び考える

民博では、JICA（国際協力機構）と協力し、滋賀県立琵琶湖博物館と共同で海外から招いた博物館実務者に対する「集団研修・博物館学集中コース」を毎年開講している。三カ月におよぶ長丁場で、近隣博物館の協力もえながら、資料収集・保存管理・映像も含む記録・展示設計までを幅広く講義するとともに、研修員との経験や知識の共有をめざすもので、前身のコースも含めると、既に一七年目のコースが現在進行中だ。全体像はいずれ本誌でも紹介されるだろうが、博物館活動全体をカ



恩納村博物館正面

き込むことでそのハンディをカバーし、積極的な活動を進めている。

## 地域との密着

住民参加や県内博物館の協力もえながら、年三回の企画展や十数回のワークショップのほか、自然を体験学習する「こども博物館」も年数回開催している。企画展やワークショップのテーマは、染色、チョウ、泡盛、海藻おしぼ、サンゴ、など、豊かな山と海の自然が中心。大きな

バーするコースとして例の少ないものだろう。

このコースには、特徴ある博物館を訪問する研修旅行も含まれており、解説を受けて議論する場が設けられている。博物館の事情は百態百様だから、できるだけ多くの博物館を実見することが、博物館を学び考えるもつとも有益な方法のひとつなのだ。

## 沖縄開発から生まれた博物館

そうした研修旅行で訪れた地域博物館のひとつに、恩納村博物館がある。沖縄には、沖縄戦の歴史を語る数多くの博物館があるが、この恩納村博物館は、地域の歴史・文化を中心に紹介する新しい博物館。その設立経緯が、一九七二年の沖縄本土復帰とその後の沖縄開発と密接にかか

取人にはならないが、シーサーなどモノづくり教室への会場貸しもおこなう。

また、ちょうど西側に海を望める立地を生かした「サンセットコンサート」や芸能祭は、失われかけた琉球舞踊など伝統芸能の伝承と復興もねらったものだ。地元在住のダイバーが撮りためた写真展を、海かららめて日本財団からの資金援助で開催するなど、資金と知恵のさまざまな工夫は、見習うべきところの多い、地域密着型の博物館である。



常設展示は民俗ゾーンと歴史・考古ゾーンに分かれている。露出展示とジオラマも多い。民俗ゾーンにある「海の恵みと生きる」コーナー

## 久保正敏

民博文化資源研究センター

京都大学大学院工学研究科修士、工学博士。民族学に情報学を取り込む民族情報学を提唱、オーストラリア先住民コミュニティ成立史の研究などのほかに、時空間統合アーカイブズの重要性を提唱している。開催中の企画展「水の器―手のひらから地球まで」の実行委員長。

わっている点だが、同道したわたしには興味深かった。

復帰を記念して一九七五年に開催された沖縄国際海洋博覧会は、その後のリゾート開発を促した。幸い恩納村にはサンゴ礁が多く、リゾートホテル建設が続き、村の財政は近隣に比べて豊かとなった。その後、一九八九年の竹下内閣による「ふるさと創生事業」の資金を活用して歴史民俗資料の収集が始まり、防衛庁からの資金も活用して二〇〇一年に博物館が開館した。建設資金はえたものの、運営資金は乏しいというハコモノの難点から、館長も非常勤で、臨時職員も含め職員はわずか六名。しかし、外部研究者や地域住民を巻



スズガイの  
アクワージ（意風産し）  
材質などにつるして産

スズガイ（水字貝）の展示。水の水字形であるため、装飾用のほかに火除けや魔除けとして玄関に吊す習慣があった。名護市や宮古島市では市の貝である



西に海を望む  
ホール

歴史・考古ゾーンで解説していただいた、2007年当時の知念勇館長

